

ET MAINTENANT

そして今は

挿画 きんぐもくせう+E&K

1

直径一メートル足らずの円筒形をした透明のカプセル・ポッドが等間隔で並んでいる。

ポッドの高さは二メートルあまり。数本のチューブがとりつけられているポッドは、生を示すかのようにかすかに振動している。さながら胎児の鼓動のように。

それぞれのチューブからは、少しずつ異なる色合いの薬液がゆつくりとポッドに送り込まれている。その微妙に異なる薬液が混ざり合ったカプセルの中は、黄褐色で、少し粘度をもっているように見える。

液体で満たされたポッドには合成人間が一体ずつ収容され、成育が続いている。

育成途中の合成人間には名前は無い。ただ、各ポッドには識別用のナンバー・プレートが取り付けられている。

C.IIからC.IXまでのプレートがついているポッドは、基盤になる遺伝子が同一のものであるらしく、髪や肌の色は同じである。一定の意図をもって育成されているためか、XX型ばかりが並んでいる。瞳を閉ざした状態であるため、虹彩は

確認できない。

基盤は同一だが、成育過程において、一体ずつに幾分かの改変が加えられているというのが、少しずつ異なる体型から判断できる。

全般的にいつて戦闘を目的として育成されているのは明らかだが、体脂肪率が限界まで低く抑えられているタイプ、Gを高くして育成したとおぼしきタイプ、瞬発力を重視したようなタイプ、持久力を強化したようなタイプ：と必要と目的に応じて投入される場面が変化するのだろうと想像できる。

それらのポッドを管理するブースで、一人の少年（まだ充分に少年とよんでもいいような年頃に見えた）が管理官に声をかけた。

「Cタイプって、以前、日本州警に刑事として潜入していた人間の遺伝子が基盤になってるんだ？」

言葉尻は微妙にあがって疑問形になっているが、答えなど必要としてはいない口ぶりだった。

「キヤルとかいったっけ……」

「カルスト！」

固有名詞がでたところで横合いからたしなめるような声が

聞こえた。

「わかつてるよ。サデム」

カルストと呼ばれた少年が脇に立つ男に向かって面倒くさそうに言う。

「よらしむべし。知らしむべからず、って？いつの時代のことだか……」

言いながら何かを思いついたようで

「C・IIを出してみてよ。もう、使えるんでしょ？調教は全過程終了してるんだよね？」

カルストが指名したのは、筋肉強化によって通常の数倍も力を発揮できるように育成されたタイプである。むしろ、筋肉強化にもなつて骨格も強化されている。そうでなければ、筋肉のパワーを最大限に発揮させることはできない。体脂肪率も低減されており、ボディビルダーが理想と思いつく体型をしている。

ポッドの中の一糸まとわぬ姿は、腹筋・背筋・側筋・胸筋・上腕筋……どこもかしこもくつきりとした筋肉で構成されている。

そのC・IIをポッドから出すようにとカルストは言う。これは、拒否を許さぬ指示に他ならない。

現在、この場にいる人間のなかで、一番権限をもっているのがカルストだというのは疑いようもない事実で、彼の言葉に反論できる者はいない。

さきほど少年から「サデム」と呼ばれた人物も指示を撤回させることはできない。お目付け役としてカルストをたし

なめることはできるが、何かを命じることはできないらしい。

「わかりました。C・IIを起動します」

管理官は送り込まれていた薬液をストップし、かわりに酸素と二酸化炭素の混合気体に切り替える。

続けてポッドから液体を排出する。

液体が流れ出て行くにしたがつて、合成人間の筋肉は一層はつきりと浮き上がってみえる。

全ての液体を排出し終わるとカプセル・ポッドは左右に開いた。

C・IIがカルストの前に立った——全裸で。

「ふーん」

全身をくまなく走査するかのようなカルストの視線にも羞恥をみせない。羞恥心という概念をもっていないのか、感情が未発達なのか、それとも他に理由があるのか、現段階ではカルストにも判断つきかねた。

「かなり変えたの？」

カルストの問いは、感情面を改変したのか、という意味であらう。

管理官は、感情をなくすような操作はしていないと呟く。

基盤になっている遺伝子から比べれば幾分感情は平板になつているかもしれないが、無感情ではないはずだと、小さな声で主張する。世間一般の労働用成人人間よりも丹念に睡眠教育を施してあるし、自己判断能力も高くなるように補助脳をプログラムしてある、と。

管理官の言葉は己の身の安全を図ろうとする姑息な手段な

のかもしれない。総裁の息子であるカルストの機嫌を損ねることは死を意味する。

それでも、C・IIのものに怖じない様子はカルストを満足させるに充分だった。

感情が未発達だろうがなんだろうが、命じられた事柄を忠実に実行する能力があればそれでいい。

「おまえに、いいものを見せてあげよう」

カルストはC・IIに着衣の暇を与えるよりも先に一枚の立体写真を示した。

「これが飛騨ジェンクス。おまえのターゲットだよ」

写真は、ジェンクスが特捜司法局に移送される直前のもので、手錠をかけられた姿で写っていた。

罪を犯したがゆえにそのような姿で写っている、というのがC・IIにあたえられた説明だった。

犯罪者を野放しにしてはいけないのだということ、生まれる（ポッドから出る）前から知っている。睡眠教育が彼女にそう教えた。

犯罪者であるジェンクスを放置しておくことは、人類に損害を与えることになるのだとC・IIは理解した。

人間のために生きること・人間のために役立つことが己の存在意義だと信じる彼女にとって、犯罪者を排除することは正しいことである。

そこには一片の疑問の余地もなかった。

なかったはずだった。

しかしながら、C・IIは、なぜかしらジェンクスの写真に懐

かしさをおぼえた。排除すべき人物だと認識していながら、同時に懐かしさと慕わしさをおぼえた——その時点では「懐かしい」という語彙も「慕わしい」という語彙も彼女の中にはなかったのだが。

語彙はなくても、自分の感じたものに名前をつけることができなくても、確実に存在するものはある。

初めて見た顔であるはずなのに、どこかで見たことがあるような気がした。

補助脳にインプットされた項目のなかにジェンクスに似た人物がいただろうか。

睡眠教育の事項のなかにジェンクスは登場しただろうか。それとも、どこか違う場所で見たのだろうか。

あるいは生まれ出る前から、共通認識として「敵」を知っていたのだろうか。

C・IIは、ジェンクスに対する既視感を理論ではなく感情の部分でまるごと受け入れた。

次に彼女がジェンクスの姿を見たのは、生まれてから二月ほど経った頃だった。

隠しカメラが送ってくる映像を見たのだ。

「動くジェンクスを見せてあげよう」とカルストはC・IIに言った。

六道リインという日本州警の刑事の部屋に隠しカメラをセットしてあること。

六道リインは、赤のキャラバンにとって目障りな存在であること。

今はまだ六道リインを殺害してはいけないこと。

以上の点をカルストはC・IIに告げた。

C・IIは、胸のうちで「将来抹殺すべき人物リスト」に六道リインの名を刻んだ。

隠し撮り用のカメラが撮影できる範囲は狭く、ノイズも混じる。部屋全体が見渡せるわけではないし、視点がぎりかえられるわけでもない。それでも、画像の中心近くにジェンクスの姿を確認することができた。音声も伝わってくる。

その映像のなかのジェンクスは、ソファにのんびりと寝そべっている。

一人の青年が、まめまめしくジェンクスの世話をやいていた。

くすんだ金髪。

若々しい表情。

それが、六道リインだとC・IIは知った。

『マイ・ハニー』と声が聞こえる。

カメラが映し出す画像から判断するに、その声の主はジェンクスである。

カメラに写っている人員は二名。

部屋の中に他の人間がいるようには見えなかった——もしかしたらカメラの範囲外に人間がいるのかもしれないが、彼女が見る限りにおいて人員は二名だった。

とすれば、『マイ・ハニー』という呼びかけは、六道リイン

に対するものでしかありえない。

つまり、カメラが映し出しているのは一組のカップルであり、一緒に暮らすほどにその仲は進展しているとみるべきであろう。

そう理解した時、C・IIの中で何かがグツリと煮えた。

言葉では言い表せない熱いもの。

自分ではどうすることもできない熱いもの。

それを鎮める方法がある、と彼女は思う。

六道リインという存在をこの世から消去すればいいのだ。

飛騨ジェンクスが自分のターゲットであるからには、そのジェンクスに味方する者もターゲットになりえる。たとえターゲットでなくても、六道リインを消去することは、気の晴れることだとC・IIは感じる。

飛騨ジェンクスよりもむしろ六道リインをこそ消去したい。

消去すべきだ。

今はまだ殺害してはいけない、ということとは、いつかは殺害してもいい時期がくるということだ。

C・IIは、自分の「抹殺すべき人物リスト」の先頭に六道リインの名を移動させた——誰に言われたわけでもなく、彼女の意味で。

「ジェンクスに招待状を出しておいたからね」

ある日、カルストがC・IIに告げた。

カルストのいう招待状がどのようなものか、C・IIは知らない。知る必要もない。

彼女は、指示に従って動いていけばいいのだ。ポッドから出て以来、ずっとそうしてきた。

そうしていれば、何も間違いは起こらなかった。

言われるとおりに行動していれば、褒めてくれる。

C・IIにとって、カルストの言葉は絶対的なものだった。

カルストが招待状を出した、と口にするからには、近日常に飛驒ジェンクスを自分の眼で見ることができるようと予測できる。

自分の前に飛驒ジェンクスが、その姿を現す——それは、とてつもなく楽しいことのように感じる。

ジェンクスの前に立つ時が待ち遠しい。

(早く来ればいいのに)

C・IIは、楽しい行事を心待ちにする子供のように、ジェンクスが現れるのを待っていた。

* * *

そして、その日がついにやってきた。
赤のキャラバンのアジトへと乗り込んできた飛驒ジェンクスを

「ようこそ」

音源を特定できない声が出迎えた。

「愛人がお待ちかねだ」

次の瞬間、部屋の床が切り取られたかのように、真四角の空間が開いた。

その空間から大型の器具がせりあがる。

器具の上昇がおわると、床はまた元の状態に戻った。

ジェンクスがリインを『マイ・ハニー』と呼んだことの結果が眼前にある。手術台のような簡素な器具に両手両足を縛められ、猿轡で発声の自由さえ奪われた六道リインというたちで。

「さて、せっかくの恋人同士の再会に無粋な真似はしたくないんだけど……君達を自由にしてあげるわけにもいかないんだ」

声が室内に反響した。

さして大きくもない声だが、部屋のつくりのせいなのか、

響いて聞こえる。

部屋の中の一部始終が、どこか離れた場所からモニタリングされている、とジェンクスにはわかる。

手の届かぬ高みから神の立場を気取った者が、彼らの行動をチェックしている。

「C・II、お前のお番だ。楽しくあそんでおいで」

声とともに、部屋の一角に亀裂が広がって、人ひとりぶんぐらゐの隙間になり、そこから筋骨隆々たる合成人間が姿をあらわした。

合成人間だと一目でわかる——通常の人間ではありえない骨格と筋肉のバランス。左右均等になるように計算しつくされた肉体は生身の人間のもちえないものだ。人は、どれほど

注意深く左右のバランスをとっても、均等にはなりえない。その左右の微妙な歪みこそが人を人間らしくしている。

(C・II?)

反射的に合成人間を見たジェンクスは、自分の視線が、がっかりとC・IIに絡めとられたのを感じた。

瞬間、合成人間の表情が輝いた。

頬が薄く染まるのもジェンクスの眼は見逃さなかった。

彼は内心眉をひそめた。

見なかったことにしたい、と思う。

思うが、なかったことにはできない。

なんだか苦いものを飲み込んだような気分になる。

仰向けに縛り付けられた状態のラインのほうが、合成人間のほうを見るのができないぶん、幸せなのかもしれない。

むろん、ジェンクスの内心の動きなど表面にはあらわれない。

無表情のまま視線だけをラインに戻す。

ジェンクスが視線を戻しても、合成人間の視線は自分の上に貼りついたままだというのをいやというほどに感じる。

ラインの唯一自由を許された眸は「室長！」と訴えている。

その訴えは、一刻も早く自分を助けてほしいという意味合ではないとジェンクスは判断した。

六道ラインは、己を第一義に考えるような人間ではない。そのことは、部下としてのラインを見ていたからわかる。

ラインが彼の部下だったのは短い期間だったが、それくらいのこととも判らないようでは、とうていシャーロキアンなど

というあだ名がつくはずもない。

ラインのほうも、ジェンクスが自分を助けるためにこの場に乗り込んできたのだなどと自惚れたりもしない。

ラインは飛騨ジェンクスという人物のひとりを知っている。全てを把握できているはずもないが、幾分か知っている。

助けにきたのではなく、ジェンクスの個人的判断によってこの場に現れたのだと知っている。

赤のキャラバンは、ラインをジェンクスに対する切り札(もしくは招待状)と見なしているが、実のところそのようなものでありはしない、ということとは彼自身が一番よく知っている。

ジェンクスの『マイ・ハニー』という言葉動に赤のキャラバンが惑わされたのだと知っている。

ラインの部屋に隠しカメラがセットされていることを承知で、それを逆利用したのだ。ラインがジェンクスの恋人だと思ひ込ませるために。

カメラのセット位置がもう少し違った場所だったなら、また違った展開になっただろう——カメラはリビングが映るようにセットされていた。それゆえ、ジェンクスはラインを「マイ・ハニー」と呼び、身の回りの世話をさせるだけで済んだ。もしも、カメラがベッドを映し出す場所にセットされていたなら、それだけでは済まなかったはずだ。

ジェンクスとラインの真の関係を把握するためには、ベッドサイドにカメラを置くべきだったのだ。そこでなら真に愛



人関係にあるかどうかを確認できたのだ。

だが、赤のキャラバンはそうしなかった。

ジェンクスの言動だけで関係を判断してしまった。

もしも、本当にベッドサイドにカメラがあったなら、ジェンクスは体の自由を奪うような薬を使ってリインを身動きできない状態にしておいてから、いかにもエッチをしていますといった様子を演じてみせたことだろうが。

ともあれ、赤のキャラバンは判断を誤ったのだ。

赤のキャラバンにとっては、リインはジェンクスに対する餌の役目を果たせるはずだった。『愛人』を餌としてちらつかせれば、それが罫だとわかっていてもジェンクスはやってくるだろう。やってこざるを得まい。

うまくすればジェンクスの頭脳を手に入れることができるかもしれない、という計算だ。

ジェンクスを仲間にひき入れることができるなら、それでよし。ひき入れることができないなら、餌でおびき出しておいて身体の不要部分を廃棄する。

ジェンクスの価値は彼の頭脳にあるのだから、肉体が減んでも差し支えない。というよりは、頭脳さえ生かし続けることができるなら——彼の脳から必要なデータを採取できるなら、肉体などないほうが都合がよい。脳は健康を保ったままに肉体の自由を奪うには四肢に至る神経を損ねればよい。

最終的にジェンクスから何も引き出すことができないなら、この世から消えてもらう。もちろん、必要事項をすべて引き出してしまった場合も同様だ。

その目的のために、C・IIをポッドから出したあとも教育と訓練を続けてきた。

赤のキャラバンは合成人間を「人間」とは見なしていない。ゆえに合成人間の心など顧みない。

心があるなどと考えもしない。

一方——

C・IIにとっては、リインは憎い恋敵だ。

いや、最初は、自分の感情に気付いてはいなかった。

ジェンクスに対する不思議な感覚があるのは、わかったが、それが世間で恋と呼ばれる感情だなどと気付いてはいなかった。

ただ、ターゲットであるとカルストから示された飛騨ジェンクスよりも六道リインを先に始末したいと感じる。他のどんな人間よりも六道リインが邪魔だと感じる。リインの存在はC・IIに不快感と不安感とを与える。そのような存在を許しておいてはいけない。

その感情が何であるのか、彼女はわかってはいなかった。名づけるすべを持たなかった。しかしながら、それは紛れもない嫉妬である。

六道リインは彼女にとって恋敵だったのだ。

ジェンクスとリインが本当は恋人でもなんでもないことなどC・IIは知らない。

たとえ、知っていたとしても、容赦しない。ジェンクスと親しく接している、その事実だけで抹殺に値する。

そうであるのに、いまだ六道リインを抹殺する許可は与え

られない。現時点でも、彼女の第一ターゲットは飛騨ジェンクスと定められたままなのだ。

飛騨ジェンクスを始末したいなどは感じないのだが、それを言葉にすることは許されていない。

それでも「楽しくあそんでおいで」と言われたからには、この部屋の中では自分の好きにしていいたいということなんだろう、とC・IIは考える。

ジェンクスを始末するについて、手法は指示されていない。与えられた指示は『殺さぬように、生かさぬように』というものである。抵抗できないようにするのはいいが、殺してしまつてはいけない。少なくともジェンクスから必要な情報を引き出すまでは、死んでもらうては困る。肉体は損傷してもいいが、脳は傷つけてはいけない。

ジェンクスの抵抗を無力化するために人質として愛人も拉致してきているのだ。

すべての情報を引き出した後は（あるいは、どうやっても情報を引き出すことができない時も）ジェンクスを抹殺する。

敵にまわすとやっかいなことこのうえない人物を生かしておいては後々の禍根になる。危険性を排除しておくことは大切なことである。

3

C・IIは、ジェンクスの方に足を踏み出した。
トクリ

心臓が鳴った。

トクリ トクリ

近づくごとに心臓がおどる。

いよいよ楽しいことが始まるうとしている。

待っていた時がついに到来したのだ。

飛騨ジェンクスが、この場に現れたのだ。

誰よりも先に抹殺したいと感じている六道リインが、何の抵抗もできない状態で目の前にあるのだ。

C・IIは、自分の唇がゆっくりと笑みを形づくるのを感じていた。

こんなにも、この時を待っていたのだとわかる。

トクリ トクリ

トク トク

鼓動がはやくなる。

視界には、ジェンクスしかない。

あと数歩——あと数歩でジェンクスに手が届く。

C・IIがジェンクスのほうに手を差し伸べた。

と同時に、ジェンクスが体ごとC・IIのほうに向いた。

瞬間、C・IIの頭の中で何かがスパークした。

（なんのために手をさしのべているのか）

彼女の中に疑問が生まれる。

何をするつもりだったのか、と自問する。

ジェンクスを相手にあそぶ。それは間違いない。さきほども言われたではないか「楽しくあそんでおいで」と。

では、どうすれば、遊べるのか。
手を差し伸べていれば遊べるのか。

そうではないような気がする。
遊ぶためには、もう少し他の方法があるはずだ。

C・IIは正対しているジェンクスから視線をそらした。
ふいに、頬が熱くなるのを感じた。

トク トク トク

鼓動が大きい。

鎮まれ心臓。

自分自身に命じてみるが、いうことをきかない。
名状しがたい昂揚感が体を包む。

ここで力強さをアピールすれば、ジェンクスに喜んでもらえるだろうか、と考える。

カルストは、彼女のパワーを褒めてくれた。

ジェンクスも同じように褒めてくれるだろうか。

ちらりとジェンクスの方に目をやった。

だが、答えは与えられない。

実際にやってみるしかない。

C・IIは、リインの縛り付けられている台に近づくと、片手でその端を捻じ曲げた。

グニヤリ

あっけなく台は変形した。

自分でも、綺麗に曲げることができた、と思う。

褒めてもらえるだろうとの期待を込めて、まっすぐにジェ

ンクスの目を見つめる。

しかし、ジェンクスは、表情を変えない。

これでは、まだ足りなかったのだろうか？

もっと凄いことをしないとジェンクスは気に入らないのだろうか？

それとも、褒めてほしそうにしたのが、いけなかったのだろうか？

どうすれば、ジェンクスは喜ぶのだろうか？

真剣にC・IIは考える。

彼女は真剣に考えているのだが、しかしながら、その様子は第三者の目には恥らっているようにも、しなを作っているようにも映る。

ジェンクスのほうも無表情ながら、しっかりと考えている。

(パワーでは、とうてい太刀打ちできない。もっとも、頭脳で私に勝てるものなどいないのだから、互角にはもちこめる。しかし……)

ちらりとリインの方を見てから、ジェンクスが口を開いた。

「あれは、私の部下なんだが、返してもらおうわけにはいかな
いかな」

現時点では、リインはジェンクスの部下ではないのだから、『元部下』というべきだが、この場にはそれをとやかく言う人間もない。

「まだまだヒョッコで、力不足だが、それでもいないと不便
なんだ……」

ジェンクスはラインの救出を目的にしているわけではないが、人質をとられた状態というのは、足枷になる。

一人で赤のキャラバンに対処するよりも二人のほうが効率的に行動できる。

ジェンクスとて、簡単に彼の要求が容れられるなどとは思ってもいない。

簡単に聞き入れてもらえるようなら、そもそも最初からこんな状況にはなっていなかったはずだ。

とりあえず、拒否されることを前提として言ってみた。だが、おもいがけず反応があった。

「ハグハグ」

C・IIが答えたのである。

「それは、交換条件ということかな？」

C・IIは嬉しそうにならずいた。

C・IIが要求するところの「ハグ」とは、「hug」とイコールであろう、とジェンクスは推測する。

これがどういう理由によるのかはジェンクスには不明だが、C・IIが自分にひとかたならぬ好意を寄せているらしいというの、表情からも態度からも明らかだ。彼女の希望を叶えれば、それに見合うだけの行動をもって応えてくれるに違いないと確信する。

そうであるだけに、希望が叶えられない場合——ジェンクスが拒否した場合に起こるのであるう事態も、並外れたものになると予測できる。怒りの矛先が真つ先に向くのはどこか。

愛しさ余って憎さ百倍、などという状況にならないことを

祈りたい、と思ってしまう。

赤のキャラバンはラインをジェンクスの愛人とみなしているから、C・IIにも、そのように教育していることだろう。

とすれば、矛先が恋敵たるラインに向かうことになるだろう。最悪の場合、命に危険が及ぶ。

ジェンクスの頭の中で、選択肢が箇条書き状態で明滅する。

① ラインには、自力脱出を期待する。

② 見捨てるわけではないが、他の方法を模索する。

③ 人ひとりの命のためと割り切る。

④ 利害関係も恋愛関係にもない人間だから人質としての価値はないと主張する。

ジェンクスの個人的希望を言えるなら、躊躇わずに①を選択する。しかしながら、今は個人的感情を排する必要がある。

彼の目的のためにはここで騒ぎを大きくすることは得策ではない。

C・IIの感情を考慮にいれて考えれば、要求をのみさえすれば、彼女を味方につけることも可能だろう。

(それしかないか)

ジェンクスの理性は「C・IIの望みどおりに行動せよ」と告げている。

しかしながら、彼の感情は理性と同じ判断を下さない。

C・IIのパワーを思うと、ハグが単なるハグで済まないかもしれない。自分自身のパワーをどの程度のもので認識しているか(あるいは認識してはいないか)わからないのだから、ジェンクスの身の安全さえ保障の限りではない。

彼女にとっては、ぎゅっと抱きしめるだけの行為も、それを受ける側には相当の体力的・精神的覚悟が必要だ。多少の苦痛と呼吸困難くらいで済めば幸い、下手をすれば骨折もあり得る。

かつて「ベア・ハグ」という格闘技の技が存在していたという情報がジェンクスの脳内から引き出されてくる。

それは、その名の通り熊の如き怪力で相手を締め上げるといふ技で、技術よりも力の強さに重点がおかれているのではないかと思われる。

その技によって脊椎に損傷を負った選手がいたという情報も連鎖的に流れ出てくる。

ジェンクスは、記憶の糸を辿りたいわけではないが、ほとんど無意識のうちに情報を引き出してしまっているようで、止められなくなる。

彼の頭脳は無事に解放される確率・少々の怪我で済む確率から最悪のケースに至る確率までを算出してしまおう。

（苦しさの余りもがいたりなどしようものなら、拒否されたと感じて、hugからhangになるかもしれない）

考えたくもない事柄が心に浮かぶ。

こんなふうな命を的にした一か八かの賭けなどジェンクスの忌避するところではある。

周到に計算し、用意し、確実に勝ちを引き寄せるのが、賢いやりかただ。

（合成人間に想いを寄せられるなどという項目があるとはな……）

自身の頭脳をもってしても予測不可能だった事柄のせいで今回は賭けに出ざるを得ないが、こんなことは二度と御免だと心の中で呟く。

「わかった。ハグハグだな。優しく頼むぞ」

それを聞くや、C・IIは満面に笑みを浮かべながらジェンクスに駆け寄り、腕をまわした。

ジェンクスのほうは、腕を広げることができなかった。まったく、そんな気分になれなかった。

C・IIの突進（駆け寄るといふよりは突進といったほうが適切である）のまえには、それだけの余裕がなかったとも言える。

それは、彼にとっては仕方のないことではあったが、この後に起きる事に対処するためには、片腕なりともC・IIの背に回しておくべきだった。

みっしりとした筋肉の質量がジェンクスの背中に感じられる。

その質量が、ジェンクスの体を締め上げる。

C・IIにとっては、締め上げているなどという意識はないのかもしれないが、ジェンクスにとっては、きつく締め上げられており、とてもものに抱擁などと呼べるような生易しいものではない。

ジェンクスは両腕を脇につけた状態で抱きしめられている。きわめて一方的に抱きしめられているのだ。

「苦しい。ちよつとゆるめてくれ」

ジェンクスの願いもC・IIの耳には届いていない。

「頼む。苦しいんだ」

今ジェンクスが動かせるのは口と指の先だけという状況である。

頼みの綱とする言葉も、それを聞こうとする意思のないところでは何の役にもたたない。

あいかかわらず、C・IIの腕の力が緩むことはない。

ジェンクスの両腕はすでに痺れてきている。

肺はもつと空気を送り込んでくれるようにと求めている。

酸素の補給が悪いせいなのか、心理的な影響が大きいのかひどい頭痛がする。自分の鼓動に頭蓋骨が同調している。

それでも、C・IIが満足するまでは、我慢しているしかない。自分自身の身の安全のために。

ラインの命の保障のために。

これらの様子をモニターで見ていたカルストは薄い笑みをもらす。

「飛驒ジェンクスもこの程度か……」

C・IIが、このまま強い力でジェンクスを締め上げて、肉体的な抵抗力を奪ってしまうのを待つだけのことか、と少し失望する。

C・IIが、与えられた命令を実行できないほどにジェンクスの抵抗が強いのも困るが、少しくらいは楽しませてくれてもいいのに、という思いもカルストの中にはある。

無抵抗の者を蹴り殺しにしても嬉しくはない。必死の抵抗も空しく、処分されて行くさまをこそ、彼は見たいのだ。

「あと、少し……かな」

あとわずかで、ジェンクスの肉体は使い物にならなくなるだろう。

しかし、その「わずか」が、いつまでも続く。いつか次の段階には進まない。

モニターに目をこらすが、C・IIの腕には、なにほどの力も込められているようには見えない。本当に「ハグハグ」しているだけのように見える。

C・IIの表情に目を移したカルストは、愕然とする。

C・IIは、陶然とした表情をしているのだ。

一瞬、モニターが壊れたかと思った。

間違ったものを映し出しているとしたか考えられなかった。

ジェンクスに注意を移す。

こちらは、紛れもない苦悶の表情だ。

これ以上強い力で抱きしめられたなら、確実に意識を手放さざるをえないだろう、と推測できる。

これらのことから総合するに、モニターが壊れたわけではない。

C・IIが命令を無視しているのだ。

いや、最初から無視していたわけではない。

途中で、C・IIになんらかの変化が生じ、カルストの命令よりも優先されるものが発生したのだ。

(基盤になる遺伝子をキヤルのものにしたのが間違いだっただけ……)

基盤がキヤルのものだといっても、遺伝子配列のことであ

って、感情を移植しているわけではない。赤のキャラバンで過ごした日々のことは、少々脚色を加えてCタイプ 성격困子のひとつにはしたが、それとても、従順に命令に従わせる役目を担っているだけのことだった。

刑事として日本州警に潜入してからのことは、一切教えていない。むろん、飛騨ジェンクスと出会ったことも、同僚だった六道ラインのこともバーリーのこと、記憶からは消去されているはずだ。

当然のことながら、ジェンクスを愛していたことなど真つ先に抹消済みだ。

であるのに、モニターに映し出されているのは、どうみても恋する乙女である。——C・IIの外見が乙女という表現に相応しいかどうかは、この際、別問題である。

（誰だよ、合成人間に「恋」なんていう概念を教えたのは）
カルストは、だれもない部屋の中で頭を抱えた。

同じ頃——

ジェンクスは酸素不足に悩まされながら考えをめぐらせている。

いっそ、C・IIを有頂天にさせるような行動に出れば、現状から解放してもらえらるだろうか。

たとえば、C・IIの頬にキスをするといったような、彼女の意表をつく行動にできれば、すぐにも解放してもらえらるだろうか。それとも、喜びのあまり、更に腕の力が強くなるだけのことだろうか。

C・IIが合成人間であるという点、生まれでてからそれほど長い時間が経過しているわけではなさそうな物言いから推察すれば、キスに慣れているとは思えない。

というよりも、誰も彼女にキスなどしてはいないだろう。

キスという行為がどういう意味合いをもつのか、という点をC・IIがすでに理解しているかどうか、はなはだ不明で、意を決して実行に移しても、何のリアクションも返ってこないという場合だってあり得るのだが、それでも、知っているのかどうかを聞きただすわけにもいかない。尋ねてしまつては、意表をつくことにはならない。

（とりあえず、ハグハグという概念はあるんだから……）

キスの意味も知っていると的前提で行動するしかない。

（こんなこと、本当に、二度とやらんぞ！）

ジェンクスは心の中で固く拳を握り締めると、己の推理を検証するための行動にでた——C・IIにキスをした。

【END】